

会議名	平成18年度「JRA畜産振興事業に関する調査研究発表会」
開催日時	平成18年11月21日(火) 10:00~16:45
開催場所	東京大学農学部 弥生講堂(東京都文京区弥生1-1-1)
主催者	財団法人 全国競馬・畜産振興会
参加人数(概数)	約150人(主として大学、民間、公益法人等の関係者および研究者)
1. 会議の概要 (500~1,000字程度または議事内容の資料添付)	<p>平成18年度JRA畜産振興事業において実施した調査研究課題7課題の発表のほか、特別講演2課題が行われた。その概要は以下のとおりである。</p> <p>I. 特別講演 特別講演として、1) 特用家畜の現状と課題について(東京大学 林 良博)および 2) 人獣共通感染症をどのように克服するかーインフルエンザをモデルとして(北海道 大学 喜多 宏)が行われ、それぞれの課題を巡って最近の話題を紹介した。</p> <p>II. 助成事業による調査研究発表 1. ハプロタイプを用いた牛肉の品種鑑定(社畜産技術協会 動物遺伝研; 渡邊敏夫): 品種間で異なるハプロタイプ頻度を指標として、黒毛和種とホルスタイン種、F1交雑種、アングス種、ヘレフォード種との鑑別技術を開発した。 2. 黒毛和種牛における経済形質遺伝子(霜降り遺伝子と発育増進遺伝子)の探索(社畜産技術協会 動物遺伝研; 杉本喜憲): 当研究所では黒毛和種経済形質のQTLゲノム上へのマッピングを行っており、ウシゲノム研究の進捗状況を紹介した。 3. DNA解析技術の利用による牛の遺伝性疾患への応用(社家畜改良事業団; 森田光夫): 牛の遺伝病のうちバンド3欠損症、血液凝固13欠損症、白血球粘着不全症など7疾患を対象として、黒毛和種およびホルスタイン種5,351頭について病因遺伝子の保有頻度を調査した成績を紹介した。 4. 鶏卵生産におけるサルモネラ汚染防止について(大阪府大; 馬場栄一郎): 産卵鶏に対するサルモネラ(SE)ワクチン接種は、SE排菌頻度を低下させるのに有効な手段であることを紹介した。 5. 豚肉処理効率化技術の開発(吊り姿勢による豚もも・うで肉除骨システムの開発(榊前川製作所; 日野和睦): 豚肉処理行程の効率化・軽労化を目的として開発した吊り姿勢による豚もも・うで肉除骨システムを紹介した。 6. ウェストナイル感染症等の防疫の現状について(動物衛生研究所; 山口成夫): ウェストナイルウイルスが国内に侵入しているか否かを、野鳥や蚊について遺伝子検出によるサーベイランスを実施したが、すべて陰性であった成績を紹介した。 7. 飼料給与等記録省力化システムの開発について(社日本農村情報システム協会; 秦 章人): IT技術(音声入力等)を利用して家畜飼養行程における各種記録のシステム化について紹介した。</p>
2. 今後の研究開発分野として重要と思われる関連発表課題・話題提供名	<p>1. ウシゲノム研究の推進 ウシゲノム研究の目的の1つは、肉質や発育に関与している有用な経済形質遺伝子の探索である。わが国における研究推進体制は十分とはいえないが、(社畜産技術協会 動物遺伝研究所)を中心として、これまでにウシゲノム連鎖地図における新規マイクロサテライトマーカーの開発数は2,000個以上に上っており、マーカー密度の高度化に大きく貢献している。</p>

<p>(分野と課題・話題提供名ごとにその概要を各200～400字程度)</p>	<p>その成果は世界的に評価されているが、具体的な果実を得るにはこうした基盤的研究の推進を図る必要がある。</p> <p>2. 豚肉処理効率化技術の開発  食肉処理では熟練工による人的労力に頼る部分が多く、自動化による効率化・軽労化が要請されている。「豚肉処理効率化技術の開発」の課題は、その端緒を開く技術として高く評価されてよい。さらなる機器・設備の開発・改良の研究を推進する必要がある。</p> <p>3. 家畜のサルモネラ、病原大腸菌の汚染防止技術  サルモネラ (SE) や病原大腸菌 (O157) は家畜には無害であっても、鶏卵や牛肉を汚染して食中毒の原因となることがある。「鶏卵生産におけるサルモネラ汚染防止」の研究により、SE ワクチン接種の有効性が示されたが、肉牛のO157汚染防止技術の開発など、家畜の飼養段階における汚染防止技術の開発が重要である。</p>
<p>3. その他の発表課題で関心のあったもの(課題ごとに概要を400字程度)</p>	<p>豚のE型肝炎ウイルス実態調査  上記の課題は「ウエストナイル感染症等の防疫の現状」の一環として調査されたものである。人のE型肝炎は、水系伝播により発展途上国で発生することがあり、近年、豚での感染が認められている(無症状)。日本人が感染抗体を保有する事例は多いが、感染経路は不明である。本調査で子豚期は高頻度で感染していることが明らかとなったが、出荷期にはウイルス排泄がみられなくなる成績を得た。</p>
<p>4. 今後研究開発課題採択に当たって参考とすべき事項等</p>	<p>1. 家畜飼養段階における畜産物の安全性確保、とくに病原大腸菌O157保菌牛の摘発と清浄化技術の開発  2. 食肉処理の自動化(ロボット)技術の開発</p>
<p>5. 会議の所感</p>	<p>本調査研究発表会は参集範囲を広げたので、従来より多数の参加者数となった。内容は広範囲に及んでおり、異分野の研究動向や技術ニーズを知るよい機会である。その反面、発表に対する討論が今一つ盛り上がりには欠けた。そのためにも、発表は端的にして討論時間を増やし、司会は専門家に依頼した方がよい。さらに、実際の現場で技術開発に従事している方々へ参加を呼びかけるべきではなかろうか。</p>
<p>報告者</p>	<p>柏崎 守</p>